

日本の皆さんへ

本書は広東語で書いたため、日本の読者には読んでいただけないことを痛感した。

そこで、この本ができるまでの経緯、そして本の内容に関わるエピソードを少しでも日本の皆さんに知っていただければと思い、日本語の序文を追加することにした。

2026年3月のある日、初めて出版社の担当者と編集チームの皆さんと会議をした。「どうしてこの本を出版しようと思ったのですか」と聞かれた。「生きているうちに、僕が日本演劇と出会ってから学んだことや、実際に現場で実践してきた経験、そしてこれまでリサーチしてきたことを本にしたい。香港にはこのジャンルの本がなくて、売れないかもしれない。でも、記録として、将来、誰かが日本文化や日本演劇に興味を持った時の参考になれば幸いです」と僕は答えた。

僕が日本演劇に出会ったきっかけは、2001年4月、偶然、日本大学芸術学部の科目履修生になり、「演技論」という授業を取ったことだった。そこで恩師の藤崎周平先生に大変お世話になり、いきなり演劇学科四年生の演技実習の授業に参加させてもらい、卒業制作の稽古まで見学させてもらった。翌年は演劇学科に正式に入学し、演技コースという役者になるためのコースで4年間勉強した。2年生からは学科内の実習発表で芝居をしたり、東京

を回って伝統芸能から小劇場までさまざまな舞台を鑑賞したり、とにかく役者になるために、できるだけたくさんの栄養を吸収するようにしていた。卒業後は東京に残り、プロの劇団に入ったり、演劇グループで活動させてもらったりする中で、たくさんの素晴らしい役者や演劇人と出会った。もちろん、数多くの素晴らしい舞台も観ることができた。

大学3年生の時、ちょうど香港の中英劇団が「留守太平間」という広東語の芝居を東京のシアターXで上演していた。会場のロビーで、当時劇団の芸術監督だった古天農（グー・ティンノン）を見かけたので、「僕は香港からの留学生ですけど、古さんですか」と声をかけて自己紹介した。すると、古さんから「終演後は打ち上げに来て」と誘っていただいた。それが、自分にとって香港と日本の演劇交流の始まりとなる、運命的な出会いだった。

2007年に香港に帰国したが、古さんのおかげで香港の演劇人たちと知り合い、少しずつ仕事のオファーが決まり、人脈が広がっていくうちに、役者の仕事以外にも、三谷幸喜作「笑の大学」、佃典彦作「ぬけがら」、中谷まゆみ作「今度は愛妻家」、向田邦子作「愛という字」、三好十郎作「胎内」、坂手洋二作「屋根裏」などの戯曲を翻訳し、広東語で上演する機会もあった。また、日本の演劇人が香港で活動された際に、コーディネーターや通訳をする機会にも恵まれ、蜷川幸雄、鄭義信、佃典彦、タニノクロウなど、たくさんの日本の素晴らしい

演劇人と出会うことができた。

2013年4月、自分のグループ「役者和戯」を立ち上げ、日本の要素を取り入れた作品を香港で作ろうと決心した。第一弾は、留学していた時に東京の新国立劇場で観て、忘れられなかった「胎内」にした。そして、日本の演出家・田中麻衣子と音楽家・国広和毅を香港の演劇人とのコラボレーションに迎え、作品を実現させた。

日本演劇を香港へ紹介し、文化交流に貢献したと評価され、2021年には香港芸術發展局から香港芸術發展賞の芸術家年賞（演劇）を受賞した。それをきっかけに、この分野で僕にしかできないことがきっとあるのではないかというヒントを得た。翌年、日本文学の「高野聖」と能の「卒塔婆小町」、そして香港の劇作家・陳志樺（マン・チャン）さんが以前僕のために書き下ろした「高野山遇見前偶像」（高野山で僕の元アイドルと出会った）を組み合わせた一人芝居「高野山の彼女」をマンさんに書いてもらった。僕はこの作品で国際演芸評論家協会（香港）の年間俳優賞を受賞し、翌年には「一人芝居」という作品を上演した。日本留学時代に衝撃を受けた数々のエピソードを、演劇を通して表現した作品だった。

2020年、新型コロナウイルスによるパンデミックで世界の演劇が一旦ストップさせられたが、僕は幸運なことに、この年、香港中文大学日本研究科の哲学修士課程に合格し、ひたすら2年間をかけて、香港の日本演劇について

研究することができた。研究の内容は、これまで香港で上演された日本演劇作品の歴史と発展であり、その中には僕自身が実際に関わった作品も少なくなかった。研究者と、現場で実践してきた演劇人という二つの立場から研究を進め、香港と日本の演劇人、合計17人にインタビューを行い、貴重な情報と資料を集めてきた。

本書は、その研究テーマに基づく論文をもとに発展させたものだが、2020年以降の香港における日本演劇の発展について、いくつかの新しい章も追加した。また、新たに行った日本の演劇人へのインタビューも収録し、本の内容に沿って新しく集めた数々の貴重な舞台写真も加え、自分自身が満足できる本に仕上げた。

この本を出版することができたのは、ずっと僕を支えてくださった皆さんのおかげだ。

香港中文大学日本研究科の呉偉明（ン・ワイメン）名誉教授のご指導とご支援がなければ、何も始まらなかった。心から感謝申し上げたい。

香港芸術發展局からの助成金、そして国際演芸評論家協会（香港）のご協力がなければ、この本を出版することもできなかった。

家族の支えがなければ、演劇の道はずっと前に辞めていたと思う。そう考えると、この本も存在しなかっただろう。

インタビューをさせていただいた香港と日本の演劇人の皆さんにも、心から感謝している。

日本

田中麻衣子

演出家、Théâtre MUIBO 主宰

渡辺弘

演劇プロデューサー

佃典彦

劇作家、演出家、役者、劇団B級遊撃隊主宰

鄭義信

劇作家、脚本家、演出家

タニノクロウ

劇作家、演出家、庭劇団ペニノ主宰

香港

陳志樺（マン・チャン）

劇作家、演出家

陳文剛（チャン・マンゴン）

演出家、役者、糊塗戲班芸術監督

陳炳釗（チャン・ベンチウ）

劇作家、演出家、前進進戲劇工作坊芸術監督

【故】古天農（ゲー・ティンノン）

劇作家、演出家、元中英劇団芸術監督

【故】鍾景輝（チョン・ゲンファイ）

演出家、香港を代表する名優、元香港戲劇協會会長

陳健彬（チャン・ギンバン）

元香港話劇団行政監督

陳國慧（バーニス・チャン）

国際演芸評論家協会（香港）マネジャー

李明珍（リー・メンザン）

元香港話劇団マネジャー

余振球（ユー・ザンカウ）

舞台美術家、演出家、劇場空間芸術監督

張秉權（チャン・ベンクーン）

演劇研究者、評論家、国際演芸評論家協会（香港）会長

梁子麒（マープル・リョン）

香港話劇団行政監督

茹國烈（ルイーズ・ユー）

香港文化と持続可能な発展センター創立者兼行政監督

序文を書いてくださった梁安玉（マギー・リョン）さん、呉偉明教授、張秉權さん、茹國烈さんにも、大変お世話になった。心より感謝している。

僕が1999年10月16日に香港を離れ、初めて海外生活を始めた場所は日本だった。最初に日本へ行った時によく聞かれたのは、「どうして日本に来たの？」という質問だった。僕はいつもこう答えた。「多分、僕の前世は日本人で、ここに残したものをを見つけるために来たんじゃないかな。」

この本は、もしかすると、それなのかもしれない。